

## 聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服

### 第1回 悪の誘惑はどこから始まるのか

#### 1 問いかけで始まる誘惑

創世記3章に記されているエバとへびのやりとりは、人間の墮落の起点として知られていますが、この場面は単なる出来事の記録ではなく、「人間がどのようにして誤った選択に至るのか」という構造を明らかにする重要な箇所です。特に注目すべきは、へびの最初の言葉です。

「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記3章1節）

この一言は、一見するとただの確認の問いのように見えます。しかし実際には、ここに誘惑の出発点がすでに含まれています。なぜなら、この問いは神のみ言そのものを否定しているのではなく、その「確かさ」に疑問を差し挟んでいるからです。

誘惑は命令として始まるものではありません。まず「問いかけ」として始まります。そしてこの問いかけは、人間の内面に小さな揺らぎを生み出します。

#### 2 み言の意味をすり替える働き

もともと神は、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」（創世記2章16～17節）と語られました。すなわち、神の言葉の中心は「禁止」ではなく「自由」にありました。

しかし、へびの問いはこの構造を歪めます。「どの木から食べてはならないのか」という言い方によって、神の言葉をあたかも過度に制限的なものとして提示しているのです。

ここに、誘惑の第一の特徴があります。それは、事実をそのまま否定するのではなく、「意味づけ」を変えることによって認識を歪めるという点です。

さらに重要なのは、「ほんとうに」という表現です。この一言によって、神のみ言は絶対的な基準から、「吟味される対象」へと引き下げられます。

本来、神の言葉は人間が従うべき基準として与えられたものでした。しかしこの問いかけを通して、人間の側がそれを「検討し、判断する立場」に移されてしまうのです。

### 3 価値の相対化という転換

この変化は、単なる疑問にとどまりません。ここで起こっているのは「価値の相対化」です。

絶対的な基準であった神のみ言が、「本当にそうなのか」「別の見方もあるのではないか」と問い直されるとき、それはもはや唯一の基準ではなく、数ある選択肢の一つへと引き下げられます。これが価値の相対化です。

このとき人間は、神に従う存在から、神の言葉を評価する存在へと位置を変えます。すなわち、「信頼」から「判断」への転換が起こるのです。

この転換こそが、墮落の本質的な出発点です。罪は行為として始まるのではなく、まず基準の喪失として始まります。

詩篇 119 篇 105 節に「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」とあるように、本来み言は、方向を定める基準の光として働くものです。

### 4 信頼が揺らぐとき人間は不安定になる

聖書全体を通して見ても、この「疑い」と「二心」の問題は極めて重く扱われています。たとえばヤコブの手紙には次のようにあります。

疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない。（ヤコブの手紙 1 章 6～8 節）

ここで語られているのは、単なる心理的な不安ではありません。神への信頼が揺らぐとき、人間の存在そのものが不安定になるという原理です。

創世記 3 章においても、まさに同じことが起ころうとしています。疑いは一つの思考にとどまらず、存在の基盤そのものを揺るがすのです。

### 5 内面に始まる変化

興味深いのは、この段階では、まだエバは実際の罪の行為に至っていないという点です。しかし、すでに内面では決定的な変化が始まっています。

神の言葉をそのまま受け取るのではなく、自分の中で再解釈し始めているのです。その結果として、エバの答えにも微妙な変化が現れます。

「これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」（創世記3章3節）

ここで「触れてはならない」という言葉が付け加えられていることは注目に値します。

神が直接語られた言葉（創世記2章17節）にはない表現であり、人間の側で何らかの付加、または解釈がなされている可能性を示しています。

いずれにせよ、この微妙なずれは、み言が受け取られる過程における変化の一端を示しています。

このように、罪は突然の行為として現れるのではなく、まず内面の認識の変化として始まります。

### 6 現代において繰り返される構造

この構造は、創世記の中だけにとどまるものではありません。現代においても同じことが繰り返されています。

絶対的な基準とされていたものが、「本当にそうなのか」「他の考え方もあるのではないかと問い直されるとき、それが真理の探求である場合もあります。

しかし、それが「従わなくてもよい理由」を見いだすために用いられるとき、そこには価値の相対化が生じています。

そして価値が相対化されるとき、人間は自らの判断を最終的な基準とすることになります。この流れは、創世記3章におけるへびとエバの会話と同じ構造を持っています。

したがって問題の本質は、「疑うこと」そのものではなく、「何を基準として疑うのか」という点にあります。基準を失った疑いは、やがて否定へと進んでいきます。

### 7 結論—誘惑の出発点

創世記3章の最初の一言は、このようにして人間の内面に小さな揺らぎを生み出しました。しかしその揺らぎは、やがて決定的な選択へとつながっていきます。

## 聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服

---

誘惑は、強制から始まるものではありません。否定からさえも始まりません。それは、「ほんとうに神が言われたのか」という一つの問いかけから始まります。

そしてその問いかけは、やがて価値の相対化を生み、神への信頼を揺るがし、人間を自らの判断へと導いていくのです。ここに墮落の第一歩があります。

## 第2回 神のみ言に対する明確な否定

### 1 明確な否定としての第2段階

創世記3章において、へびの誘惑は段階的に進みます。最初の「ほんとうに神が言われたのですか」という問いかけによって疑いを生じさせたあと、次に現れるのは神のみ言に対する明確な否定です。

「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創世記3章4節）

ここで初めて、神の言葉と正面から対立する主張が提示されます。

神は「取って食べると、きっと死ぬであろう」（創世記2章17節）と語られました。それに対してへびは、「決して死ぬことはない」と断言します。これは単なる解釈の違いではなく、神のみ言そのものの否定です。

したがって、誘惑の第2段階は、「疑い」から一歩進んで「否定」へと至る段階と言えます。

### 2 恐れに働きかける言葉

しかし注目すべきは、この否定の仕方です。へびの言葉は単なる反論ではなく、人間の内面にある「恐れ」に直接働きかける形をとっています。

神のみ言の中で、エバの判断に最も直接的に作用したのは「死ぬ」という警告でした。なぜなら、それは本能的な恐れに直結するものだったからです。

へびはまさにその点に焦点を当て、「決して死ぬことはない」と語ることによって、その恐れを取り除こうとします。

ここに誘惑の重要な特徴があります。それは、恐れを取り除くことによって人間を安心させるという働きです。

人間は恐れを感じているときに慎重になりますが、その恐れが取り除かれるとき、その慎重さは一気に緩みます。へびはこの心理的な構造に働きかけているのです。

### 3 偽りによって安心させる構造

このように見ると、へびの言葉は単なる偽りではなく、偽りによって安心させることにその目的があることが分かります。

もしへびが露骨に悪を勧めていたならば、エバは警戒したでしょう。しかし実際には逆です。

へびは「大丈夫だ」「心配しなくてよい」という方向で語ります。この安心感こそが神の言葉の効力を弱めていきます。

つまり、誘惑は恐れを強める形ではなく、むしろ恐れを取り除く形で進行するのです。

この構造は、聖書の他の箇所とも一致します。たとえばイエスは、悪魔について次のように語られました。

彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。（ヨハネによる福音書 8章 44節）

ここで示されているのは、悪の本質が「偽り」であるという点です。そしてその偽りは、人間を直接破壊する形ではなく、まず認識を歪める形で働きます。エレミヤ書 6章 14節はこの構造を鋭く指摘しています。

「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている。」（エレミヤ書 6章 14節）

これは、民が深刻な傷を負っているにもかかわらず、その現実を直視せず、「平安だ」と安易な慰めの言葉で欺瞞を働く偽預言者を告発している聖句です。

へびの「決して死ぬことはない」という言葉も、まさにこの構造と同じです。

#### 4 真理の無効化という働き

へびの言葉がもたらした結果は、単に一つの意見が提示されたということではありません。それは、神のみ言そのものの効力を内側から無効化する働きでした。

神のみ言が「きっと死ぬであろう」という絶対的な警告として機能している限り、人間はその行為に踏み出すことができません。しかし、「死ぬことはない」と思い始めたとき、その制約は消えます。

ここにおいて起こっているのは、「禁止の解除」ではなく「意味の消失」です。すなわち、神のみ言がもはや現実的な重みを持たなくなるということです。

このようにして、人間は外的に強制されることなく、内的に自由になったように感じながら、実際には誤った方向へと進んでいきます。

### 5 現代における類似の構造

この構造は現代においても繰り返されています。

たとえば、「それくらい大丈夫だ」「問題にはならない」「誰も困らない」といった言葉は、一見すると安心を与える言葉のように見えます。

しかし、それが本来守るべき基準を軽んじる方向に働くとき、それはへびの誘惑と同じ構造を持つこととなります。

ここで重要なのは、その言葉が正しいかどうか以上に、「どのような働きをしているか」という点です。すなわち、その言葉が人間の内面において警戒を弱め、慎重さを緩める方向に働いているかどうかです。

もしそうであるならば、それは単なる助言ではなく、「安心させる偽り」として機能している可能性があります。

### 6 結論—恐れを取り除く誘惑

第1回で見たように、誘惑は「疑い」から始まります。そして第2回で明らかになったことは、その次に「否定」が来るということです。

疑いによって基準が揺らぎ、否定によってその基準が取り払われる。この2段階を経て、人間は次の段階——すなわち魅力的な選択へと導かれていきます。

したがって、へびの言葉は単独で理解すべきものではなく、全体の流れの中で理解されるべきものです。

「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創世記3章4節）という言葉は、人間に安心感を与えるように聞こえますが、実際には、神のみ言を否定し、その効力を失わせる働きをもっています。

誘惑は、恐れを煽ることによってではなく、むしろ恐れを取り除くことによって力を持ちます。そしてそのとき、人間は自ら進んで誤った選択へと向かっていくのです。ここに誘惑の第2段階の本質があります。

## 第3回 悪は善を装ってやってくる

### 1 否定の次に提示されるもの

創世記3章におけるへびの誘惑は、「疑い」から「否定」へと進み、そして第3の段階に至ります。それは、新たな価値の提示がなされる段階です。

「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」（創世記3章5節）

ここで重要なのは、へびが単に「死なない」と言っただけではないという点です。それに続けて、「神のようになれる」という積極的な意味づけが与えられています。

これによって、善悪の木の実を取って食べる行為は、単なる違反ではなく、「価値ある選択」へと転換されます。

### 2 「善悪を知る」とは何か

「善悪を知る」という表現は、単なる知識の獲得ではなく、「何が善で何が悪かを自ら決定する立場に立つこと」を指しています。

聖書の文脈において、この立場は神に帰属するものでした（創世記3章22節参照）。

したがって「神のようになる」とは、神に従う存在としての本来の位置を離れ、自らが基準になろうとすることに他なりません。へびの狙いはここにありました。

### 3 成長に見せかけたへびの誘惑

へびの誘惑が持つもう一つの特徴は、それが「成長」や「向上」のように見えるという点です。

「目が開ける」「賢くなる」「神のようになる」という表現は、いずれも人間にとって魅力的なものです。そこには、低い状態から高い状態へと進むというイメージがあります。

しかしここで問われるべきは、その方向が正しいかどうかです。

人間が成長を求めること自体は本来良いことですが、その方向が神から離れる

ものであるならば、それは成長ではなく逸脱となります。

すなわち、誘惑は「悪に見えるもの」としてではなく、「より良いものに見えるもの」として提示されるということです。

### 4 欲望と正当化の関係

このような誘惑を受けることによって、エバの内面には変化が起こります。

**女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われた（創世記3章6節）**

ここには三つの要素が示されています。「食べるに良い」「目に美しい」「賢くなるに好ましい」という評価です。これは単なる衝動ではなく、明確な理由づけを伴っています。

つまり、欲望はそのままの形で現れるのではなく、「正当化」を伴って現れるのです。この構造について、ヤコブの手紙は次のように語っています。

**人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。（ヤコブの手紙1章14～15節）**

ここで示されているのは、外から強制されるのではなく、内側にある欲望が働くという原理です。

そしてその欲望は、単なる衝動ではなく、「それは良いものだ」と思わせる形で人間を動かします。パウロもこの構造を見抜いていました。

**サタンも光の天使に擬装するのだから。（コリント人への第二の手紙11章14節）**

誘惑はその正体を隠し、光と善の装いをとって近づいてきます。それゆえ、「良さそうに見える」こと自体が、かえって警戒のしるしとなりうるのです。

### 5 価値として提示される罪

このように見ると、罪の特徴が明確になります。それは「悪」として提示されるのではなく、「価値あるもの」として提示されるという点です。

もし罪が最初から明確な悪として現れるならば、人間はそれを避けるでしょう。しかし実際には逆です。罪はしばしば、美しさや利益、成長といった形をと

って現れます。

ここにおいて、人間は単に誘惑されるのではなく、「自分は正しい選択をしている」と思いながら、その方向へと進んでいくということです。

したがって、問題の本質は「何を求めるか」ではなく、「その求めがどの基準に基づいているか」という点にあります。

### 6 現代における具体的な表れ

この構造は、現代においても極めて明確に見られます。

たとえば、「自分らしく生きる」「もっと自由になる」「能力を最大限に発揮する」といった言葉は、それ自体としては否定されるべきものではありません。

しかし、それが神の基準を離れて自己中心的に用いられるとき、それは創世記3章と同じ構造を持つこととなります。

すなわち、「より良い生き方」を求めているようでありながら、その実質は「自らを基準とする生き方」へと移行しているのです。

ここでもまた、罪は悪としてではなく、価値あるものとして提示されています。

### 7 結論—魅力あるものとして働きかけてくる誘惑

「神のようになれる」という言葉は、人間にとって非常に魅力的に響きます。しかしその実質は、神から離れて自らを基準とする存在へと変わることでした。

誘惑は単なる否定では終わりません。それは必ず、何らかの魅力を伴って提示されます。そしてその魅力は、人間の内にある欲求と結びつくことによって力を得ます。

ここに誘惑の第3段階の本質があります。すなわち、罪は悪としてではなく、価値あるものとして提示されるということです。

そして、そのとき人間は、外から強制されることなく、自ら進んでその道を選ぶようになるのです。

## 第4回 誘惑による選択を正しいと感じてしまう仕組み

### 1 悪の誘惑の特徴

創世記3章のへびの誘惑を注意深く見ると、決定的に重要な事実気づきます。それは、へびが一度も「食べなさい」と命じていないという点です。

へびは問いを投げかけ、否定を行い、魅力を提示しました。しかし最後まで命令はしていません。それにもかかわらず、エバは善悪の実を取って食べてしまいました。

女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ…（創世記3章6節）

ここで取って食べたのは、あくまでエバ自身です。この構造こそが誘惑の完成形です。

誘惑は強制によって成立するのではなく、あくまで「自分で選んだ」と思わせる形で成立するのです。

### 2 自由意志と責任の問題

この点は自由意志と責任の問題に直結します。もし人間が外から強制されて行動したのであれば、その責任は本人にあるとは言えません。

しかし創世記3章を見ると、取って食べるという選択は人間自身によってなされています。だからこそ、その結果もまた人間自身が負うこととなります。

ここで明らかになるのは、神が人間に自由意志を与えられた理由です。

自由とは単に選択できるということではなく、その選択には責任が伴うということです。そして誘惑はその自由の領域に働きかけるのです。申命記30章19節には次のようにあります。

わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。（申命記30章19節）

神は答えを強制するのではなく、「選びなさい」と語りかけています。

### 3 「自分で選んだ」と思わせる仕組み

では、なぜ人は誘惑による選択を正しいものだと思ってしまうのでしょうか。その理由は、次の三段階を経ていくところにあります。

第一に疑いによって基準が揺らぎ、第二に否定によって警告が取り除かれ、第三に魅力によって新たな価値が提示されます。

このような段階を経たとき、人間の内面には一つの結論が形成されます。それは「これは良い選択である」という認識です。

この段階に至ると、もはや外からの命令は不要になります。人間は自らの判断によって行動します。しかしその判断は、他者によってすでに方向づけられているのです。

これは、外的には自由に見えながら、内的には一定の方向へと導かれている状態です。

### 4 イエスの試みに見る対照的構造

この構造は、新約聖書におけるイエスの試みの場面にも確認することができます。

荒野での試みにおいて、悪魔はイエスに対して「石をパンに変えよ」「身を投げよ」「わたしを拝め」と語ります（マタイ福音書4章）。

しかしここでも強制はありません。すべては提案の形で提示されています。

さらに注目すべきは、悪魔が聖句さえ引用している点です。

悪魔は詩篇 91 篇 11～12 節を引用し、「『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」（マタイ福音書4章6節）と語ります。

聖句を用いながら神から離れる行為へと誘う、という構造がここにあります。

これは、誘惑があからさまな悪としてではなく、正当性を帯びた形で現れることを示しています。

しかしイエスは、それぞれに対して「～と書いてある」と答え、神のみ言を基

準として退けられました。ここに創世記3章との決定的な違いがあります。

エバは神のみ言を自分の判断の対象としましたが、イエスは神のみ言を自分の最終的な判断基準とされたのです。

つまり、エバはみ言を自分の考えで評価しましたが、イエスは自分の考えをみ言に合わせたのです。

### 5 責任の所在としての罪

このように見ると罪の本質がより明確になります。罪とは単なる行為の誤りではなく、「自らの判断を最終基準とした選択」です。

そしてその選択は、外的には自由でありながら、内的には誘導されたものである可能性を含んでいます。

さらに重要なことは、そのように誘導されたとしても、最終的な選択は人間自身によってなされているという点です。だからこそ人間に責任があるのです。

これは厳しいことですが、同時に重要でもあります。なぜなら、責任があるということは、逆に言えば「再び選び直す可能性」もまた人間に与えられているということだからです。

### 6 現代における自由の錯覚

現代社会においても、「自分で選んでいる」という感覚は強調されます。しかし実際には、その選択は環境や情報、価値観によって大きく影響を受けています。

何が良いとされ、何が望ましいとされるかは、外部から与えられた枠組みによって形成されている場合が少なくありません。

このとき、人間は自由であると感じながらも、その自由は完全に中立なものではなく、一定の方向へと導かれている可能性があります。

この構造は、創世記3章において、人が自分の判断で選んでいるようでありながら、その判断がすでに影響を受けている状態と本質的に同じものです。

### 7 結論—悪による誘惑の完成

創世記3章において、へびは最後まで命令をしませんでした。それにもかかわらず、人間は自ら進んで善悪の実を取って食べました。ここに悪による誘惑の完

成があります。

誘惑は強制では成立しません。それは、「自分で選んだ」と思わせる形で初めて成立します。そしてそのとき、人間は自らの行為に対して責任を負う存在となります。

この構造を理解することは、単に過去の出来事を理解することではありません。それは、今もなお繰り返されている、人間の選択の本質を理解することにつながります。

すなわち、誘惑とは、人間の自由を奪うものではなく、人間の自由を利用して悪の道に導くものであるということです。

## 第5回 現代における誘惑の構造

### 1 創世記は過去の物語ではない

これまで見てきたように、創世記3章におけるへびの誘惑は、「疑い」「否定」「魅力」「自発的選択」という段階を経て進行しました。

この構造は、過去の出来事の記録ではありません。それは人間の内面に働く普遍的な原理を示しています。

ですから、この物語は昔起こったことではなく、今も繰り返されていることとして理解されるべきものです。時代や文化が変わっても、人間の内面の構造は本質的には変わっていません。

### 2 現代社会でも展開される誘惑の構造

現代社会においても、創世記3章と同じ構造はさまざまな形で現れています。

まず、「ほんとうにそうなのか」という問いが投げかけられます。これは批判的思考として有益な側面もありますが、それが絶対的な基準そのものを揺るがす方向に働くとき、単なる探求ではなくなります。

次に、「大丈夫だ」「問題ない」という言葉によって、本来の警戒が取り除かれます。ここでは、危険や責任が過小評価される傾向が生まれます。

さらに、「それによって成長できる」「自分らしくなれる」といった価値が提示されます。この段階において、選択は単なる許容ではなく、積極的に望ましいものとして認識されるようになります。

そして最後に、人はそれを「自分で選んだ」と感じながら、その方向へと進んでいきます。この流れは、創世記3章の構造と本質的に一致しています。

### 3 情報社会における価値の相対化

特に現代において顕著なのは、情報の増大による価値の相対化です。

多様な意見や価値観が提示されること自体は、必ずしも否定されるべきものではありません。しかし、それによってすべてが同列に扱われるとき、「何が真なのか」という基準が曖昧になります。

その結果、絶対的な基準は失われ、「どれを選んでもよい」という感覚が広が

ります。

この状態は、一見すると自由が拡大したように見えますが、実際には、基準を失った状態で選択を行うことになり、その選択は外部の影響を受けやすくなるのです。

これは、創世記3章における「価値の相対化」が、現代的な形で再現されていると言えます。

### 4 倫理の曖昧化と判断の変化

価値の相対化は、倫理の領域にも影響を及ぼします。

かつては明確に区別されていた善と悪の境界が、「状況による」「人それぞれである」という言葉によって曖昧にされることがあります。

その結果として、「何が正しいか」よりも「自分がどう感じるか」が判断の基準になりやすくなるのです。

この変化は、人間が自ら善悪を判断しようとする方向、すなわち「神のようになろうとする方向」と一致しています。ここでもまた、創世記3章の構造が繰り返されています。

### 5 信仰と判断基準の問題

このような状況において、信仰の意味が改めて問われます。

信仰とは単なる感情や習慣ではなく、「何を最終的な基準とするか」という問題と関わっています。つまり、神のみ言を基準とするのか、それとも自らの判断を基準とするのかという問題です。

この選択は、創世記3章において、エバが神のみ言ではなく自分の判断に従った出来事として示されています。イエスは次のように語られました。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイによる福音書4章4節）

この言葉は、人間の生が何によって支えられるべきかを明確に示しています。

すなわち、人間は単に物質的・感覚的な基準によってのみ生きるのではなく、神の言葉を基準として生きる存在であるということです。パウロはさらにこのように語っています。

あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。（ローマ人への手紙 12 章 2 節）

ここで示されているのは、基準は外から押しつけられるものではなく、内面の刷新によって自らのものになるという原理です。

### 6 現代における選択

現代における選択は、一見すると多様で自由に見えます。しかしその本質は、創世記 3 章と同じ問いに集約されます。すなわち「何を基準として選ぶのか」という問いです。

情報や価値観が多様であるほど、この問いは重要になります。なぜなら、基準を持たない選択は、結果として周囲の影響に流される選択になりやすいからです。

したがって、本当の意味での自由とは、単に選択肢が多いことではなく、正しい基準に基づいて選ぶことができる状態を指すのです。

### 7 結論—現代も繰り返される創世記の物語

創世記 3 章の物語は、決して過去のものではありません。それは、現代においても形を変えて繰り返されています。

疑いによって始まり、否定によって基準が崩され、魅力によって方向づけられ、最終的に自分の選択として行動に至る。この流れは、今もなお人間の内面において働いています。

したがって、創世記に示されたへびの誘惑について理解することは、単に聖書を理解することだけではなく、自分自身の判断と選択の構造を理解することでもあるのです。

へブル人への手紙 4 章 12 節は「神の言は生きていて、力があり……」と語ります。創世記の言葉は、今もなお、人間の選択の本質を照らし出す生きたみ言として、私たちに語りかけています。